

壇の浦を過ぐ（村上仏山）

短歌 今ぞ知る御裳川の流れには

浪の下にも都ありとは

魚莊の蟹舎雨煙と為る

蓑笠の独り過ぐ壇の浦の辺

千載の帝魂呼べども返らず

春風腸は断つ御裳川

魚莊蟹舎雨爲煙 蓑笠濁過壇浦邊

千歳帝魂呼不返 春風腸断御裳川

解説 この詩は春雨の中で壇の浦を過ぎ、ここで入水された安徳

天皇の御魂を弔ったもの。

語釈 ※壇の浦 山口県下関市の東端にある。平家滅亡の地として

知られる古戦場。※魚莊蟹舎 漁家。漁夫の家。※蓑笠 みのとか

さ。それをつけて雨や雪などを防ぐ。※千載 長い年月。千年。

※帝魂 安徳帝の御魂。※呼不返 どんなに呼んでももどらない意。

※御裳川 壇浦に注ぐ小川の名。御裳濯川とも書く。

通釈 見わたせば、漁師の小屋が点々と、折からの雨にかすんでい

る。ここ壇の浦を自分分はただひとり蓑笠を纏い通り過ぎていく。

あの幼い安徳天皇が入水されてからはや千年、いくらお呼びしても

御魂は帰ってこない。いま、春風そよぐ御裳川のほとりに佇めば、

当時のことが偲ばれて、腸はちぎれんばかりである。